Journal of National Fisheries University 46 (3) 145−154 (1998)

T. S. エリオットの詩における河と海と母親

古 賀 元 章*

River, Sea and Mother in T. S. Eliot's Poems

Motoaki Koga*

T. S. Eliot was greatly influenced by both the Mississippi River and the fishing city of Gloucester, New England. In addition to these influences, Eliot was also greatly affected by his mother, Charlotte Champe Eliot. Though he sometimes repelled her, it is obvious that Eliot heartily loved his mother. This paper examines the relation between river, sea and mother in four of Eliot's most famous poems. In "The Love Song of J. Alfred Prufrock" (1910−11), the final drowning scene is associated with the flood of the river and suggests that Eliot cannot bear causing his mother great distress. In *The Waste Land* (1922), when recollecting the view of Gloucester, Eliot entreats his mother to end his suffering. In *Ash-Wednesday* (1930), having both the river and Gloucester in mind, Eliot prays to his mother as if she were holy and capable of redeeming him from a sinful life. "The Dry Salvages" (1941) indicates that he determines to live in accordance with the everlasting love of his mother, who remains the center of his daily life.

はじめに

T. S. Eliot は評論 "The Influence of Landscape upon the Poet" (1960) の中で，自分の詩に影響を及ぼした風景を二つ挙げている。一つはアメリカのミズーリ州セントルイスの生家の近くを流れていたミシシッピ河であり，もう一つは同国のニューイングランドの海である。[1] 1893年に彼の父親 Henry Ware Eliot, Sr. は，この海のマサチューセッツ州側の沿岸の漁港グロスター (Gloucester) に別荘を建てた。幸せであった子供時代のエリオット[2]は，この河やこの漁港での光景に深い印象を受けている。また，二番目の妻 Valerie Eliot が編集した *The Letters of T. S. Eliot: Vol. 1898−1922* (以下，*Letters* と略す) には，母親 Charlotte Champe Eliot への彼の敬愛が至る所でうかがわれる。

エリオットの詩は，彼の子供時代におけるミシシッピ河やグロスター沿岸を暗示したり描写したりしている。そこには，上述した事実に注目すると，母親に対する彼の思いが含まれていると判断される。

水産大学校研究業績 第1580号，1997年8月22日受付.
Contribution from National Fisheries University, №1580. Received Aug. 22, 1997.
* 水産大学校水産情報経営学科社会文化講座 (Social and Cultural Studies, Department of Fisheries Information and Management, National Fisheries University).

では，エリオットの詩には，ミシシッピ河やグロスター沿岸と母親との間にどのようなかかわりが見られるのであろうか。このかかわりの経緯を考察するために，彼の代表的な四つの詩――"The Love Song of J. Alfred Pruforck" (1910－11)，*The Waste Land*(1922)，*Ash-Wednesday* (1930)，"The Dry Salvages"(1941)――を執筆順に取り上げることにしたい。

1 エリオットとセントルイス

まず，"The Love Song of J. Alfred Prufrock"（以下，"Prufrock"と略す）に目を向けてみよう。この詩の語り手であるプルーフロックは "Let us go and make our vist." (l. 12)[3] と述べて，次のような場所へ行く。

> In the room the women come and go
> Talking of Michelangelo. (ll. 13－14)

彼は妙に思案して，ミケランジェロを話している女性たちに近づくことができない。その後，彼は彼女たちの部屋の外の風景を次のように述べる。

> The yellow fog that rubs its back upon the window-panes,
> The yellow smoke that rubs its muzzle on the window-panes,
> Licked its tongue into the corners of the evening,
> Lingered upon the pools that stand in drains,
> Let fall upon its back the soot that falls from chimmeys,
> Slipped by the terrace, made a sudden leap,
> And seeing that it was a soft October night,
> Curled once about the house, and fell asleep.
> (ll. 15－22)

霧や煙は，エリオットがセントルイスで過ごした彼の子供時代の光景を下敷きにしている。その光景は，煙霧がイリノイ州の炭田から時々やって来て，この都市をおおったことである。[4]ここでの霧や煙が猫にたとえられている。プルーフロックは，まるで猫が飼い主に体をすり寄せるかのようにして，ミケランジェロを話している女性たちに語りかけたいのである。

ところで，"Prufrock" の描写には，霧や煙の他にもセントルイスから取り入れられている。プルーフロックという名前は，少年エリオットがこの都市で見かけたある店の看板から用いられている。[5]そこで，この詩は彼の子供時代の出来事を含んでいるのである。

上の場面に続くのが次のような詩行である。

> And indeed there will be time
> For the yellow smoke that slides along the street
> Rubbing its back upon the window-panes;
> (ll. 23－25)

ここでも，エリオットの子供時代の回想が盛り込まれている。彼はセントルイスの単なる過去の回想ではなく，時間も気にしている。

エリオットの回想によれば，プルーフロックは40歳位の中年の男であると同時に，詩人自身でもある。[6]ここでは，この語り手がエリオットであることに注目したい。そうすると，エリオットは，部屋の中にいる女性たちを強く意識するこの語り手の姿を通して，どのような自己の感情を表現しようとしたのであろうか。"Prufrock" が書かれた頃のエリオットの実人生を考慮に入れて，以下でこの問題を検討したい。

"Prufrock" が執筆されたのは1910年である。エリオットはこの年の10月に，一年間の勉学をする目的でフランスのパリへ旅立っている。その目的の一つは，パリで本当の詩を学ぶためであった。[7]しかし，彼の両親は，当初このパリ留学に反対している。とりわけ母親の強い反対の気持ちは，彼女が息子に宛てた1910年4月3日付の次のような手紙の内容から判断できる。

> I have rather hoped you would not specialize later on French literature. I suppose you will know better in June what you want to do next year. And you will have the literary judgement of able advisers probably. I can not bear to think of your being alone in Paris, the very words give me a chill. English speaking countries seem so different from foreign. I do not admire the French nation, and have less confidence in individuals of that race than in English.[8]

彼女が息子のパリ留学をこのように強く反対するのは，エリオット家の家風を堅持したいからであると考えられる。その家風は，彼女の義父であり息子の祖父である William Greenleaf Eliot が残した遺訓である。その遺訓は，

公共への義務と慈善と立派な仕事を行うことであった。[9] 義父の遺訓を守って社会福祉の仕事に就いていた彼女[10]にとって，息子の行動はこのような家風から逸脱するものである。

上述の事態に直面したエリオットは，両親を説得してパリへ向かった。"Prufrock" の描写にセントルイスでの彼の子供時代が含まれていたことを重視すれば，部屋の中にいる女性たちは，この都市に住んでいた彼の母親や姉たちを示唆していると言えよう。プルーフロックは，この詩の中の女性たちに対して優柔不断な態度であった。エリオットはこの態度に，エリオット家の家風と自分の希望との板ばさみを反映させているのであると判断できる。そこには，母親の存在を強く意識する彼の姿が浮かび上がってくるであろう。

プルーフロックは同伴者 "you" にも注意を払っている。この同伴者が描かれている場面をここに列挙してみよう。

> Let us go then, you and I,
> When the evening is spread out against the sky
> (ll. 1−2)

> Streets that follow like a tedious argumnt
> Of insidious intent
> To lead you to an overwhelming question...
> (ll. 8−10)

> There will be time, there will be time
> To prepare a face to meet the faces that you meet;
> There will be time to murder and create,
> And time for all the works and days of hands
> That lift and drop a question on your plate;
> Time for you and time for me, (ll. 26−31)

> And I have known the eyes already, known them all —
> The eyes that fix you in a formulated phrase,
> (ll. 55−56)

> And the afternoon, the evening, sleeps so peacefully!
> Smoothed by the longer fingers,
> Asleep...tired...or it malingers,
> Stretched on the floor, here beside you and me.
> (ll. 75−78)

この同伴者は男性の友人か仲間である，と後年エリオットは Kristian Smidt に発言している。[11] この発言と "Prufrock" に暗示されているエリオットの子供時代を関連づけたとき，上の場面に登場する "you" の側面[12]は，この時期の詩人自身であると言えよう。エリオットは，家族の愛情に包まれた楽しい子供時代の日々を思い起こしている。母親は，子供たちが忘れてしまわないように願って，1904年に義父の回想録を出版している。彼女はこの回想録の中で，義父の美しい目の真剣な表情を記憶している。[13] したがって，上の引用文の55−56行にある "t(T)he eyes" は，エリオットの母親や姉たちの目ばかりではなく，彼の祖父の目までも指しているのであろう。また，56行の "a formulated phrase" は，彼が母親や姉たちから聞かされた祖父の遺訓の言葉をほのめかしていると考えられよう。

では，なぜエリオットは幸せであった子供時代を思い出して，母親を強く意識するのであろうか。それは，彼がこの思い出によって現在の自分を勇気づけ，パリ留学という行動を母親に是非とも理解してもらいたいからであると思われる。この問題が "an overwhelming question" として示唆されていると言える。また，パリで住んでいてもこの問題の解決が可能ではないかという彼の思いは，"t(T)here will be time" というプルーフロックの言葉に暗に含まれているのであると判断されよう。

"Prufrock" は次のような詩行で終わる。

> We have lingered in the chambers of the sea
> By sea-girls wreathed with seaweed red and brown
> Till human voices wake us, and we drown.
> (ll. 129−31)

エリオットと子供時代の彼が共にいた場所は，彼らを魅了する海底のイメージで伝えられている。また，彼らの溺死が示されている。これらの描写の原型は，エリオットの生家の近くにあったミシシッピ河であると思われる。晩年の彼は，アメリカの小説家 Mark Twain の著書 *The Adventures of Huckleberry Finn* (1950)の序文の中で，この河について次のように書いている。

> ...the river with its strong, swift current is the dictator to the raft or to the steamboat. It is a treacherous and capricious dictator. At one season, it may move sluggishly in a channel so narrow that, encountering it for the first time

at that point, one can hardly believe that it has travelled already for hundreds of miles, and has yet many hundreds of miles to go; at another season, it may obliterate the low Illinois shore to a horizon of water, while in its bed it runs with a speed such that no man or beast can survive in it. At such times, it carries down human bodies, cattle and houses. At least twice, at St. Louis, the western and the eastern shores have been separated by the fall of bridges, until the designer of the great Eads Bridge devised a structure which could resist the floods. In my own childhood, it was not unusual for the spring freshet to interrupt railway travel; and then the traveller to the East had to take steamboat from the levee up to Alton, at a higher level on the Illinois shore, before he could begin his rail journey. The river is never wholly chartable; it changes its pace, it shifts its channel, unaccountably; it may suddenly efface a sandbar, and throw up another bar where before was navigable water.[14)]

彼は，子供時代に見たミシシッピ河の様子を詳細に語っている。この河が彼に深く印象づけているのがわかる。

この事実を参考にして，"Prufrock" の最後4行の描写を再び考えてみたい。エリオットと少年期の彼を魅了する海底は，彼らにとって印象深いミシシッピ河の海底を下敷きにしていると言えよう。この河の洪水のとき，人間や家畜が死んだり家が壊れたりした。この河のそうした光景が，この詩におけるエリオットと少年期の彼の溺死の背景となっているのであろう。エリオットは海底の描写を用いて，母親や姉たちと過ごしたセントルイス時代を思い続けている。これは，今回の行動を母親に了解してもらいたい彼の気持ちを表していると思われる。しかし，最終行での上述した二人の溺死のイメージは，この了解が不成功に終わったことを暗示している。なぜなら，この溺死は，彼らが母親の元に引き寄せられることを意味するからである。この詩を書いていた頃のエリオットは，過保護な母親から離れて自由に羽ばたくことができずにいるのである。

2 人生に対するエリオットの不満

エリオットは，*The Waste Land* (1922) を執筆した動機について次のように述べている。

I wrote "The Waste Land" simply to relieve my own feelings; ...[15)]

'Various critics have done me the honour to interpret the poem in terms of criticism of the contemporary world, have considered it, as an important bit of social criticism. To me it was only the relief of a personal and wholly insignificant grouse against life; it is just a piece of rhythmical grumbling.'[16)]

これら二つの発言から，人生に対する彼の不満がこの詩の中に含蓄されているのが考えられる。では，その不満はどのようなものであろうか。また，彼はその不満をどのような形で解消しようとしたのであろうか。ここでは，これらの問題の一部を検討して，[17)]人生に行き詰まったときの彼にとって母親の存在がいかに重要であるのかを指摘したい。

The Waste Land は5部から構成されている。第1部 "The Burial of the Dead" では次のような詩行がある。

Under the brown fog of a winter dawn,
A crowd flowed London Bridge, so many,
I had not thought death had undone so many.
(ll. 61-63)

61－62行は，ロンドン市民が冬の早朝に通勤する場面である。63行は，この詩の原注によれば，イタリアの詩人 Dante Alighieri の *Inferno* III, 55-57 の "si lunga tratta／di gente, ch'io non averei creduto／che morte tanta n'avesse disfatta."("such a long stream of people, that I should never have believed death had undone so many."[18)]) を下敷きにしている。ダンテのこの作品に登場するのは，生前に自分の欲望に固執し，完全に死にきれないで地獄にいる亡霊たちである。ロンドン市民が，そうした亡霊たちにたとえられている。エリオットはこの描写を通して，ロンドン市民の内面の堕落を批判している。

エリオットのこのような批判には，彼のその頃の精神状態と関係があるように思われる。*The Waste Land* を書いていたとき，彼はロンドンのシティー地区にあるロイズ銀行 (Lloyds Bank) に1917年から勤めていた。同銀行での彼の仕事は，これまでの教師の生活よりも収入が良くて体の疲れが少なかった。しかし，後に彼は，ロイド銀行で

難問題に直面して悩むようになる。そのことは，彼が Lytton Strachery に書いた1919年6月1日付の次のような手紙の中に見られる。

> My thoughts are absorbed in questions more important than ever enter the heads of deans — as *why* it is cheaper to buy steel bars from America than Middlesborough, and the probable effect — the exchange difficulties with Poland — and the appreciation of the rupee. My evenings in Bridge. The effect is to make me regard London with disdain, and divide mankind into supermen, termites and wireworms. I am sojourning among the termites. At any rate coheres. I feel sufficiently specialised, at present, to inspect or hear any ideas with impunity.[19]

ここで注意を引くのは，エリオットが仕事上の負担が重荷となって，ロンドンを軽蔑していることである。この軽蔑が，ロンドン市民を亡霊たちにたとえる彼の描写（61－63行）に反映していると言えよう。

第2部 "A Game of Chess" には，ロンドンの下町の酒場で次のような光景が見られる。

> Well, if Albert won't leave you alone, there it is, I said,
> What you get married for if you don't want children?
> HURRY UP PLEASE ITS TIME
> Well, that Sunday. Albert was home, they had a hot gammon,
> And they asked me in to dinner, to get the beauty of it hot —
> HURRY UP PLEASE ITS TIME
> HURRY UP PLEASE ITS TIME (ll. 163－69)

この光景は，一人の女性がリル（Lil）に話している。話の内容は，復員して帰って来るリルの夫アルバートのことである。二人の女性の会話の間に閉店を告げる声が挿入されている。エリオットは1916－20年に，ロンドンのクロフォード・マンションズ（Crowford Mansions）で暮らしていた。このフラットの向かい側には酒場があった。彼が1922年9月21日に書いた John Quinn 宛の手紙には，"Perhaps the greatest curse of my life is noise and the associations which imagination immediately suggest with various noises."[20]と書かれている。この手紙の内容は，エリオットが向かい側の酒場から聞こえた閉店時間の耳障りな声を指していると考えられる。もしそうであれば，彼の体験した耳障りな声が "HURRY UP PLEASE ITS TIME" に示唆されていることになる。したがって，163－69行は，人々の騒々しい生活に対する彼の嫌悪感を表現していると考えられよう。

ところで，*The Waste Land* を執筆中のエリオットに一つの大きな出来事が起こっている。それは，彼の父親が1919年1月上旬に亡くなったことである。エリオットは，その直後の26日にクウィンに次のような手紙を書いている。

> I explained to you when I wrote last how important it was for family reasons to get something in the way of a book published in America. Since then my father has died, but this does not weaken the need for a book at al — it really reinforces it — my mother is still alive.[21]

エリオットは，クウィンに宛てた1919年1月6日の手紙の中で，イギリス定住の正しさを両親に納得させるために一冊の本を出版したいと表明していた。[22]上の手紙の内容が示すように，エリオットが父親の死亡後も一冊の本の出版にこだわるは，自分の現在の人生を母親に認めてもらいたいからである。

上の手紙の内容は同時に，エリオットが母親の愛情を渇望していることも暗示している。それは，彼が1920年2月15日に出した二通の手紙（兄 Henry Ware Eliot, Jr. 宛[23]と母親宛[24]）の中で，母親としきりに会いたがっていることから推測できる。

エリオットは1920年に神経衰弱に陥っている。Ottoline Morrell の勧めで，彼はスイス西部の都市ローザンヌ（Lausanne）で精神科医 Roger Vittoz 博士の治療を受けている。エリオットはモレルに書いた同年11月30日付の手紙の中で，この都市の様子を次のように述べている。

> This is just to tell you that I am here, in your room (so they tell me) and under Vittoz; and that I am very much pleased, with Lausanne, with the pension (the food is *excellent*, and the people make everything easy for one — ordering milk etc.) and with Vittoz. I like him very much personally, and he inspires me with confidence — his diagnosis was good and in short he

is, I am sure much more what I want than the man in London.... So thank *you* very much for Vittoz, and for the pension. Of course I can't tell *much* about the method yet, but at moments I feel more calm than I have for many many years — since childhood — that may be illusionary — we shall see.[25)]

エリオットはくつろいだ気分を味わっている。ローザンヌにいるとき，彼がこのような気分で書き上げたのが，第5部 "What the Thunder Said" である。たとえば，次のような詩行がある。

If there were
water
And no rock
If there were rock
And also water
And water
A spring
A pool among the rock
If there were the sound of water only
Not the cicada
And dry grass singing
But sound of water over a rock
Where the hermit-thrush sings in the pine trees
Drip drop drip drop drop drop drop
But there is no water (ll. 345−58)

357行の原注が示しているのは，彼が前行のツグミの鳴き声をカナダのケベック州で聞いたことや，Frank M. Chapman の著書 *Handbook of Birds of Eastern North America* に言及してこの鳥の鳴き声を称賛していることである。また，357行はチャップマンの著書から用いられた言葉である。[26)]そこで，345−58行は，エリオットが現在の平安な心境をツグミのリズミカルな鳴き声で言い表していると考えられる。

ここで，346−58行のそうした描写の背景を検討してみたい。エリオットは，*The Waste Land* の第5部をくつろいだ気分で脱稿した。彼のこのような気分は幸せな子供時代以来であった。この詩を推敲していたとき，彼は母親と再会することを大変喜んでいた。同時代のエリオットは，父親がアメリカのマサチューセッツ州の漁港グロスターに建てた別荘で家族と一緒に夏を過ごした。これらの事実を参考にすると，海とのかかわりを連想させる345−58行の背景には，少年エリオットがこの別荘に行って見かけた海にまつわる場面があると判断されよう。[27)]この場面の中心となるのが彼の母親である。なぜなら，イギリスに住んでいたときの1915−19年に送った母親宛の手紙の中で，エリオットはグロスターに是非存在してほしい母親の姿を書き綴っているからである。その一例を挙げれば，1917年5月20日付の母親宛の手紙である。そこには，"I am glad you are going to Gloucester after all. I could not bear to think of your not being there in the summer."[28)]という彼の言葉がある。

こうして *The Waste Land* の345−58行は，エリオットが楽しかったグロスター時代を思い起こして，人生に対する不満（銀行での仕事のストレスや酒場の騒音）を解消しようとしたのである。そのグロスター時代は，母親を中心とした世界であった。したがって，これら14行には，母親の愛情に助けを求める彼の姿が暗示されていると考えよいであろう。彼はアメリカを離れてイギリスに定住しようとしても，母親の愛情の重要さを痛感しているのである。

3 エリオットと二人の女性

エリオットは，二人の女性を強く意識しながら *Ash-Wednesday* (1930)を書いた。[29)]そのうちの一人は彼の母親である。それは，彼が1917年10月24日に出した母親宛の手紙の中で，"I am constantly thinking of you and picturing you in past scenes, and trying to picture me in the present."[30)]と述べていることから推察できよう。もう一人の女性は彼の最初の妻Vivienne Eliotである。それは，1930年4月24日に限定出版されたこの詩に "To My Wife" という彼の献辞があること[31)]から判断できよう。

次のような詩行を引用して，これら二人の女性に対するエリオットの気持ちの一端を考察してみたい。

Grace to the Mother
For the Garden
Where all love ends. (ll. 86−88)

イギリスに住んでいたエリオットは，同国で知り合ったヴィヴィアンと1915年に結婚する。二人の生活は，後に彼が述べるように，[32)]うまく行かなかった。彼女は結婚したときからノイローゼ気味であった。彼は，彼女を面倒みることに加えて，ロイド銀行や *The Criterion* の編集長の仕事

の重圧のために疲れ切ってしまう。ついに，彼はBertrand Russell に宛てた1925年5月7日付の手紙の中で，妻との離別を表明する。[33]エリオットのこうした人生の苦悩を考えると，88行はこの離別を伝えているように思われる。また，"the Mother" は彼の母親を示唆しているであろし，"the Garden" は彼の生家の庭を示唆しているであろう。そうすると，上の詩行は，彼が母親の慈愛によって人生の苦悩を克服したいという願いを暗に表現していると言ってよいであろう。

エリオットの母親が1929年9月に死去した。その後に書かれたのが，次のような詩行である。

And the lost heart stiffens and rejoices
In the lost lilac and the lost voices
And the weak spirit quickens to rebel
For the bent golden-rod and the lost sea smell
Quickens to recover
The cry of quail and the whirling plover
(ll. 195－200)

彼は，子供時代にグロスターの別荘で過ごした光景を描いている。春になると，この別荘の近辺にはライラックスが咲いていた。[34]この別荘が見下ろす海から，いろいろな声が聞こえた。[35]コリンウズラやチドリが観察された。[36]グロスターでのそうした思い出深い世界は，本稿ですでに述べたように，母親を中心としたものであった。したがって，彼はこの世界を再現することによって，今は亡き母親からの慈愛を求めているのである。

エリオットのこのような姿を伝えているのが，*Ash-Wednesday* の終わり近くの次のような場面である。

Blessèd sister, holy mother, spirit of the
fountain, spirit of the garden,
Suffer us not to mock ourselves with falsehood
Teach us to care and not to care
Teach us to sit still
Even among these rocks,
Our peace in His will
And even among thse rocks
Sister, mother
And spirit of the river, spirit of the sea,
(ll. 209－17)

本稿で紹介した詩行には，彼の伝記的要素が含蓄されていた。ここでもこの伝記的要素を調べてみよう。" Blessèd sister", "holy mother", "Sister", "mother" は，聖女に高められた彼の母親を暗示している。"the spirit of fountain", "these rocks", "spirit of the sea" は，エリオット家の別荘から見られた光景に言及している。"spirit of the garden" は，彼の生家を下敷きにしているように思われる。"spirit of river" は，その生家の近くを流れるミシシッピ河を踏まえていると言える。そうすると，彼はグロスター時代ばかりではなく，セントルイス時代までも含めた深遠な静寂の世界を希求している。その世界の中心には母親がいるのである。

上の詩行には，妻に対するエリオットの思いも含まれている。210－12行の "us"，210行の "ourselves"，214行の "Our" は，彼と妻を示唆している。彼は "Dante" (1929) の中で，13世紀イタリアの修道女 Piccarda de Donati の言葉 " la sua volontade è nostra pace." ("His will is our peace.") を解説している。その解説は，誰にでも平等である神の祝福にはいろいろな段階が存在することである。[37]この段階論を考慮に入れると，214行は，妻と私が別々の人生を送ることになっても二人の上に神の恵みがあるようにというエリオットの祈りを描いている。この行を除く210－15行では，妻と私にどのような人生の苦難が待ち構えていようとも，神が二人を正しく導くように彼は祈っている。

エリオットはこうした祈りが神に届いて，子供時代のような幸せな世界に住むことができるように願っている。加えて，彼は現在の自分の気持ちを妻が理解してくれるようにも願っている。"To My Wife" という彼の献辞が，そのことを示していると言えよう。彼は母親に，神へのこれらの願いのとりなしを希求しているのである。

エリオットは，*Ash-Wednesday* を次のように結んでいる。

Suffer me not to be separated

And let my cry come unto Thee. (ll. 218－19)

"us", "ourselves", "Our" から "me", "my" へと表現の変化が見られる。この変化に注目すると，上の2行は，神との太い絆ばかりではなく，母親との太い絆も結びたい彼の切実な叫びを伝えている。母親への彼の依存度は，*The Waste Land* の場合よりも強くなっている。

4 ミシシッピ河とグロスター

エリオットの最後の詩 *Four Quartets* (1943) に収められているのが，"The Dry Salvages" である。この詩は，次のような書き出しで始まっている。

> I do not know much about gods; but I think that the river
> Is a strong brown god — sullen, untamed and intractable,
> Patient to some degree, at first recognised as a frcntier;
> Useful, untrustworthy, as a conveyer of commerce;
> Then only a problem confornting the builder of bridges.
> The problem once solved, the brown god is almost forgotten
> By the dwellers in cities — ever, however, implacable,
> Keeping his seasons and rages, destroyer, reminder
> Of what men choose to forget. Unhonoured, unpropitiated
> By worshippers of the machine, but waiting, watching and waiting (ll. 1−10)

ここに描かれているのは，彼がセントルイス時代に見かけたミシシッピ河の様子に基づいている。本稿は，彼がトウェインの著書 *The Adventures of Huckleberry Finn* に書いた序文の文章を以前に紹介した。この文章から，この詩のミシシッピ河の様子は概ね理解できよう。

では，エリオットは "The Dry Salvages" の中で，ミシシッピ河に対してどのような思いを抱いていたと推察できるのであろうか。この点について論述してみたい。

トウェインの著書の序文には，エリオットの次ような文章も見られる。

> ..., the River itself has no beginning or end. In its beginning, it is not yet the River; in its end, it is nc longer the River. What we call its headwaters is only a selection from among the innumerable sources which flow together to compose it. At what point in its course does the Mississippi become what the Mississippi *means*? It is both one and many; it is the Mississippi of this book only after its union with the Big Muddy — the Missouri; it derives some of its character from the Ohio, the Tennessee and other confluents. And at the end it merely disappears among its deltas: it is no longer there, but it is still where it was, hundreds of miles to the North. The River cannot tolerate any design, to a story which is its story, that might interfere with its dominance. Things must merely happen, here and there, to the people who live along its shores or who commit themselves to its current.[38)]

エリオットは地理的な見地から，この河が始めと終わりのない存在であることを述べている。この河のそうした存在が，"The Dry Salvages" の冒頭にも暗示されていると言えよう。なぜなら，そこでは，どのようなものからも左右されないこの河の独自の有り様が読み取れるからである。

ミシシッピ河に対するエリオットの思いはそのことだけにとどまらないであろう。彼は *Ash-Wednesday* の中で，セントルイス時代やグロスター時代を含んだ深遠で静寂な世界を描いていた。そこには，中心人物として母親がいた。"The Dry Salvages" の書き出しは，始めと終わりのないミシシッピ河を伝えていた。これら二つの詩のそうした描写を読み合わせると，後者の詩の書き出しの描写では，深遠で静寂な世界の中心にいる母親がこの河と同じ状態にまで高められていると判断できよう。

その後，エリオットは次のように書いている。

> The river is within us, the sea is all about us;
> The sea is the land's edge also, the granite
> Into which it reaches, the beaches where it tosses
> Its hints of earlier and other creation:
> The starfish, the horseshoe crab, the whale's backbone;
> The pools where it offers to our curiosity
> The more delicate algae and the sea anemone.
> (ll. 15−21)

この詩の書き出し (1−10行) について考察したことを参考にすると，15行の "us" の一面はエリオットと子供時代の彼を指している。15−16行の "sea" は，グロスターの

エリオット家の別荘から見えた海に言及している。グロスターは，エリオットにとって母親との思い出が深い場所であった。"the land's edge" 以下の光景は，少年エリオットがこの別荘での滞在中に体験したと想像されること[39]を踏まえている。そうすると，15行の二番目の "us" の一面と20行の "our" の一面も，エリオットと子供時代の彼を指している。両者のこうした一体は，ミシシッピ河の場合と同じように，グロスターも始めと終わりのない存在になっていることを意味する。したがって，上の詩行はミシシッピ河とグロスターを包んだ深遠で静寂な世界を暗に表現している。この世界の中心には母親がいるのである。

エリオットは，幸せであった子供時代の体験を回想することの意義を次のように述べている。

> We had the experience but missed the meaning,
> And approach to the meaning restores the experience
> In a different form, beyond any meaning
> We can assign to happiness.... (ll. 93－96)

93行と95行の "We" の一面にも，エリオットと少年期の彼が含まれてる。エリオットは昔の自分と一体になることによって，子供時代の体験の場所（ミシシッピ河とグロスター）が始めと終わりのない存在であることを発見した。そうした存在の源が彼の母親であった。したがって，母親の慈愛が，彼の心の中でいつも生き続けるのである。上の詩行は，そのことを示唆していると言ってよいであろう。彼は母親の慈愛を大切にして，これらの人生を生きていく決心をしている。

おわりに

若い頃のエリオットは，エリオット家の家訓に基づいた母親の教育方針に反発して苦しんだ。しかし，人生に行き詰まったとき，彼は母親と一緒に過ごした幸せな子供時代の体験を回想して，彼女の慈愛を嘆願した。後年，この慈愛が一過性ではないものに高められていった。母親に対するエリオットの一連の思いに深くかかわっていたのが，彼のそうした体験であった。

注

1) T. S. Eliot, "The Influence of Landscape upon the Poet," *Daedalus, Journal of the American Academy of Arts and Science* 89.2 (Spring 1960): 422.
2) Peter Ackroyd, *T. S. Eliot: A Life* (New York: Simon and Schuster, 1984) 13.
3) エリオットの詩からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* (London: Faber and Faber, 1970) による。
4) Kristian Smidt, "Dikteren og kritikeren T. S. Eliot 75 år imorgen" ("The Poet and the Critic T. S. Eliot 75 Years Old Tomorrow"), *Aftenposten* 422 (25 Sept. 1963): 3. なお，ノルウェー語で書かれたスミットの論文は，Ms. Turid Grønning に英訳してただきました。ここに感謝の意を表します。See also Ackroyd 23.
5) William K. Wyant, Jr., "Nobel Winners," *St. Louis Post-Dispatch* 81.315 (29 Nov. 1959): 8I.
6) Eliot, "T. S. Eliot... An Interview," *Grantite Review* 24.3 (1962): 17.
7) Eliot, "What France Means to you," *La France Libre* 8.44 (15 June 1944): 94.
8) Eliot, *Letters*, ed. Valerie Eliot (London: Faber and Faber, 1988) 13.
9) V. S. Pritchett, "'Our Mr. Eliot' Grows Younger," *New York Times Magazine* (21 Sept. 1958): 73.
10) 母親は，たとえば，少年裁判所の改革を行った。See M. W. Childs, "From a Distinguished Former St. Louisan," *St. Louis Post-Dispatch* 83.39 (15 Oct. 1930): 3B.
11) Kristian Smidt, *Poetry and Belief in the Work of T. S. Eliot* (London: Routledge and Kegan Paul, 1961) 85.
12) "I" をプルーフロックと見なしたときの "you" のさまざまな解釈の可能性については，拙稿「"The Love Sonf of J. Alfred Prufrock" における語り手の苦悩」松元寛先生退官記念論文集刊行委員会編『松元寛先生退官記念英米文学語学研究』（東京：英宝社，1987）を参照。
13) Charlotte C. Eliot, *William Greenleaf Eliot: Minister, Educator, Philanthropist* (Boston : Houghton, Mifflin and Co., 1904) 58.
14) Eliot, introduction, *The Adventure of Huckleberry Finn*, by Samuel L. Clemens (Mark Twain) (London: The Cresset Press, 1950) xii-xiii. なお，Samuel L. Clemens はマーク・トウェ

インの実名である。

15) Eliot, *On Poetry* (Conford, Mass.: Conford Academy, 1947) 10.

16) Eliot, *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts Including the Annotation of Ezra Pound*, ed. Valerie Eliot (London: Faber and Faber, 1971) 1.

17) この検討は，拙稿「T. S. エリオットの非個性的詩論についての一考察」『英語英文学新潮』(1991－92年)(東京：ニューカレントインターナショナル，1992)での記述内容に基づいていることをお断りしたい。

18) B. C. Southam, *A Student's Guide to the Selected Poems of T. S. Eliot* (London: Faber and Faber, 1994) 151.

19) Eliot, *Letters* 299.

20) Eliot, *Letters* 573.

21) Eliot, *Letters* 269.

22) Eliot, *Letters* 266.

23) Eliot, *Letters* 364-65.

24) Eliot, *Letters* 365-66.

25) Eliot, *Letters* 490.

26) Ronald Bush, *T. S. Eliot: A Study in Character and Style* (New York: Oxford UP, 1984) 75.

27) このように判断されるのは，次に述べるような写真が存在するからである。ヴァレリー・エリオットが編集した夫の書簡集の192頁と193頁の間には，別荘の近くにある大きな岩の上で母親と一緒にいたり，また，グロスターの海岸で従姉妹たちと遊んだりしている子供時代のエリオットの写真が挿入されている。この書簡集の416頁と417頁には，この別荘から見える海の光景が挿入されている。

28) Eliot, *Letters* 181.

29) この詩にうかがわれるエリオットの母親や最初の妻については，拙稿「*Ash-Wednesday* と二人の女性」，河井迪男先生退官記念論文集刊行委員会編『河井迪先生退官記念英語英文学研究』(東京：英宝社，1993)の中で言及している。本稿では，この拙稿の言及を踏まえていることをお断りしたい。

30) Eliot, *Letters* 203.

31) Donald Gallup, *T. S. Eliot: A Bibliography* (London: Faber and Faber, 1970) 39.

32) Eliot, letter to Paul Elmer More, 18 May 1933, Paul Elmer More Papers, Princeton U Library, Princeton.

33) Bertrand Russell, *The Autobiography of Bertrand Russell, 1914－1944* (London: George Allen and Unwin, 1978) 174.

34) John D. Boyd, S. J., "*The Dry Salvages:* Topography as Symbol," *Renascence* 20.3 (Spring 1968): 122.

35) たとえば，"The Dry Salvages" の題名となっている岩礁群がある。エリオットはこの詩の中で，その岩礁群で聞かれる声について次のように書いている。

The sea howl
And the sea yelp, are different voices
Often together heard: the wine in the rigging,
The menance and caress of wave that breaks
on water,
The distant rote in the grantite teeth,
And the wailing warning from the
approaching headland
Are all sea voices, and the heaving groaner
Rounded homewards, and the seagull:
(ll. 26－33)

36) John J. Soldo, *The Tempering of T. S. Eliot* (Ann Arbor, Michigan: UMI Research Press, 1983) 6.

37) Eliot, "Dante," *Selected Essays* (London: Faber and Faber, 1951) 265. なお，ピッカルダの言葉とその英訳は，同頁から引用している。

38) Eliot, introduction, *The Adventure of Huckleberry Finn* xvi.

39) たとえば "sea anemone" については，次のようなエリオットの文章から，グロスターの海岸での彼の体験が考えられよう(see Boyd 121)。Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism: Studies in the Relation of Criticism to Poetry in England* (London: Faber and Faber, 1950) 78－79: "There might be the experience of a child of ten, a small boy peering through sea-water in a rock-pool, and finding a sea-anemone for the first time: ..."